

島本和彦の

# バスケットボールは こんなにおもしろい！

島本 和彦

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：島本さんは、その道では有名なバスケットボール界のオーソリティーでいらっしゃいます。娘のハイスクール時代の友人のお父さんということでお目にかかったのが縁ですね。『月刊バスケットボール』の創刊から四半世紀にわたって編集に携わってこられたそうですが、もともとジャーナリストとしてスタートされたのですか？

島本：そうですね。大学1年のときから玉川大学の出版部でアルバイトをしていましたから。バスケットの道に入ったのは会社に入って雑誌を作ることになってからですが、スポーツは好きで学生時代はずっとバレーボールをやっていました。玉川学園という、音楽や美術が盛んで、スポーツはどうしてもついでというような学園でしたから、バレー部がなかったの、高校、大学と部を作ってスポーツを楽しんでいました。

佐多：島本さんはいつもチャレンジをしてこられたので、今日はバスケットボールをきっかけに生命力がわき出るような話を聞かせていただければと思います。島本さんというどうしてもNBA\*のほうに話がいってしましますが、近年世界中を熱狂させているバスケットも、十数年前まではアメリカでもさほど人気のあるスポーツではなかったそうですね。

島本：そうですね。バスケットはそのころまで黒人の割合の多い、ドラッグが蔓延しているといわれる、イメージのあまりよくないゲームだったんです。それがマジック・ジョンソンとラリー・バードというスターの登場で一変してしまいました。彼らをはじめとするマルチ・プレーヤーたちが、複雑なフォーメーションを驚くべきスピードでこなして人々を魅了したので、人気が一気に高まりました。

佐多：世界中でバスケットに興味のなかった人たちにまでアメリカのバスケットのすごさを見せつけたのが、パレセロナ・オリンピックのドリームチームでしたね。マジック・ジョンソンのHIV感染も衝撃的でしたし。

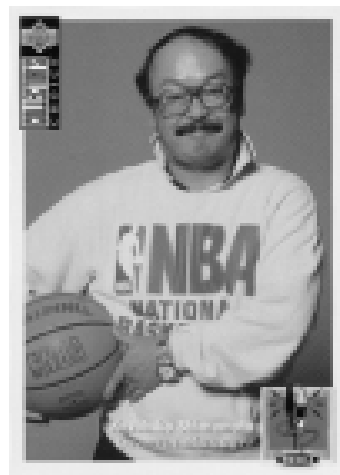
島本：NBAのチームは契約時に選手に保険をかけますが、ジョンソンのHIVは保険加入時の身

体検査で見つかったんです。保菌者ですが発症はしていません。現在、中国系のドクターが主治医で、米国でも最高のケアを受けているはずですよ。彼は今「マジック・ジョンソン・ファンデーション」を設立して活発に活動しています。これは地域のHIV/AIDS教育・防止プログラムとしてスタートしましたが、現在はもっと幅広く、アメリカの若者たちのための教育・健康・社会プログラムを助成したり癌撲滅運動を行ったりしています。

佐多：先シーズンで引退しましたが、マイケル・ジョーダンとはまた優等生そのものの選手で、アメリカン・ヒーローの一人ですね。

島本：アメリカ人に言わせると、マジック・ジョンソンは隣のお兄さんみたいな感じで、マイケル・ジョーダンはヒーローなんですね。ジョーダンは他の選手がロッカールームで裸でインタビューを受けたりするなかで、絶対にシャワーを浴びてスーツに着替えてから受けるんです。要するに話すこともプロの仕事だからと。決して感情的な言葉を使わないし、皆がこうあってほしいというような理想的な言葉をはいてくれる。人間、せつば詰まったところでどんな態度をとるかで、人間の格がわかると言われますが、ファンはそれを彼のプレーに見るわけですよ。追い込まれて残り何秒しかないというときに、もってこいといって、相手が皆ディフェンスに来るのにそれを破って決めて勝つ。有名な社会派コラムニストのボブ・グリーンは「彼は冬の寒いときに、全米の子供や大人に暖かい夢を見せてくれた」と語っています。スポーツの技だけではなく、観客を魅了する点においてマイケル・ジョーダンほど優れたスポーツ選手は今後現れないだろうと言われています。

アメリカでは高校のチームを作るとき、トライアウトという入部試験があるんです。ジョーダンが試験を受けたとき同じ学年に2mの子がいて、彼は170cm台だったので落とされました。それでも負けたことのない自分が負けたということまで辛い1年を過ごしたんですが、現在アメリカ中で「あのマイケルでさえ落ちて、それからあれほどまでに変わったのだから、君が今落ちても頑張るんだよ」という励ましの逸話と



島本 和彦 / しもと・かずひこ  
1946年東京生まれ。1973年『月刊バスケットボール』（日本文化出版）の創刊に取り組み、1975年より同誌の編集長を務める。以後一貫してバスケットボールに関係し、アジア大会、ユニバーシアード、世界選手権、オリンピック、また、NBAのあらゆるシーンを取材。1985年よりNHK、CSのスポーツi/ESPNでTV解説も務める。現在は日本文化出版（株）取締役。またバスケットボール・ファンクラブ「HOOP HYSTERIA」の代表でもある。（HOOP HYSTERIAホームページ <http://www.bea.hi-ho.ne.jp/s1-rb/hoophysteria/>）

して使われています。ジョーダンは挫折やハンデを必ずプラスに変えていく、どんな小さなことでもモチベーションとして頑張れる方向にもっていかれる人なんですね。

やっぱり人間、自分でもやりたいと思いがらも弱さがあるってできないことを、平気でやってしまう人がいるということで、夢を見ることが出来ますよね。世の中には体の強い人もいれば弱い人もいますが、決められた運命の中で最大限にがんばらなければしょうがないんじゃないかとジョーダンを見ていて思いますね。

佐多：島本さんの著書『NBA雑学バイブル』で拝見しましたが、アメリカの小学生4,000人に誰と一番ランチを一緒に食べたいかというアンケートをとったら、2位のクリントン大統領とマイケル・ジャクソンを抑えてマイケル・ジョーダンが堂々の1位だったそうですね。

島本：それだけバスケットが社会に占める割合が大きいということでしょう。例えば日本では、男の子とお父さんが必ずといっていいほどキャッチボールをしますね。あれがアメリカではバスケットなんです。自宅のガレージにフープ（バスケットリング）があって、お父さんと一対一でやっているところが映画などでもよく見られますね。また、ドリブリングという言葉は、翻訳の世界では「竹馬の友」のような意味があるそうです。それだけバスケットが生活の中に入り込んでいるんですね。

佐多：島本さんはその著書の中で、その国のバスケットボールへの理解度、普及度がボールの売り行きで計れると書いておられます。1992～3年頃のデータだそうです。アメリカは1年間に920万個で27人に1つ、日本が125万個で100



人に1つくらいの割合になるそうですね。

島本：この、視聴率ならぬ販売率でいくと日本は世界第6位とよく健闘していますね。ですがアメリカはなんといってもダントツで、僕がよく遊びに行く家はボールが7つも8つもゴロゴロ転がっています。バスケットは激しくやればいくらかでも激しくなるスポーツですが、やろうと思えばいくらかでもゆったりできるスポーツです。アメリカでは40歳代、50歳代、60歳代などと、年齢でリーグが分かれています。60歳代になるともうお腹が出てただボールを回しているだけという感じ。でもシュートはよく入る。そんな風にしていくつになってもスポーツで体を動かすことを楽しんでいます。

佐多：アメリカは国民全体が心からスポーツを楽しんでいる感じですね。そういう環境も整っている。スポーツを本当に熱心に育てようとしていますね。

島本：例えば子供たちにバスケットを教えようとしませんか。アメリカではサマーキャンプなどには親たちが1日いくらかと払うわけですね。日本はバスケットにしてもバレー、サッカーにしても団体スポーツはタダで教えてもらえるものと思っています。私たちが今やっているキャンプでは1日一人5,000円とって、50～60人集まってやっています。タダということは責任がないんです。我々は、やるからには楽しくしてあげなくちゃいけない。絶対怒らないでうまいうまいって誉めながらやっている。いいところを見つけてあげると、本当におもしろいほど成長するんですね。

佐多：ハーフコートで3人ずつでプレイするのは3オン3というんですね。アメリカでは、町の中のコートで若者たちがプレイしているのをよく目にしますが、日本にも根づいてきたと聞いています。

島本：アメリカには3つの大きな大会があって、最も参加者の多い大学生の大会では20万人が集まります。NBAの選手もすべて、この3オン3でバスケットの楽しさを知るんですね。

日本では10年くらい前にやってみようということになり、最初は集まるかどうかかわからなかったで、『月刊バスケットボール』で小さな広告をうち、24チーム募集しました。シューズ・メーカーの担当者など“さくら”も用意していたのですが、かろうじて30チームの応募があった。雑誌の中で大特集を組んでその楽しさを報告し、半年後に第2回を開いたら180チームも応募がありました。現在は、シューズ・メーカーがスポンサーになったりして裾野が広がってきましたし、96年からは、簡単に少ないスペースでできるという点に注目して、4人制サッカーのフットサルとともに通産省が、「3オン3とフットサルによる商店街活性化委員会」というプロジェクトをスタートさせています。僕の知人は「島本さん、いいこと始めてくれたね」って、平均年齢40歳のチームを作りました。「ゴルフも4人、麻雀も4人でしょ。バスケットやったらまた4人で動ける」って楽しそうです。昔スポーツやっていて今もやりたい気持ちはあるのに、という中年の方は多いですね。日本でももっと多くの人が気軽にスポーツを楽しめる環境づくりができるといいですね。

佐多：MLB（大リーグ野球）の野茂、伊良部選手のように日本人選手がNBAに行ってプレーする日はくるんでしょうか。

島本：部分的技術は通用する選手もいるかもしれませんが、まずは大学バスケットへの挑戦からでしょうね。先日、日本のプロ野球が60年の歴史を刻んだと言っていましたが、最初の頃食えるか食えないかわからずプロに飛び込む人がいたわけですね。それから30年たって、村上雅則さん、マッシー・村上さんがアメリカにチャレンジしましたね。それから30年後に野茂です。バスケットは日本ではまだプロもありませんから、これから20～30年かかるかなと思いますね。

佐多：島本さんご自身は今も取締役として、現場から離れてコンサルタント的に雑誌にかかわっておられるそうですが、今後どんなことにチャレンジされるのでしょうか？

島本：ゴルフのボビー・ジョーンズとか野球のジ

ョー・ディマジオなどアメリカの偉大なスポーツ選手の系譜のようなものがあります。強くてやさしくて清潔白であるという、理想のアメリカ人でもあるわけですね。ジョーダンを含めてそういったことをテーマにした本を書きたいと思っています。あとは、今のバスケット・キャンプを続けていきたいですね。バスケットはチームのスポーツですが、それを個人で習いに来られるようなキャンプを日本に根づかせたいですね。

佐多：あまりバスケットに縁のない人々へのバスケットの楽しみ方をひとつ。

島本：アメリカに行ったら、是非NBAのゲームをごらんになってください。ゲームがある日なら、ホテルでチケットが手に入るか聞いてみれば調べて取ってくれます。コートサイドは200ドルはするしプレミアもつきますが、上のほうの席なら10ドルくらいからあります。スポーツ、あるいはバスケットはエンターテインメントだと実感できると思います。

それとムービー。『HOOP DREAMS』という映画があるんですが、シカゴ郊外の貧困地域に育ったNBAプレイヤーを夢見る実在の14歳の少年2人を、4年間追いつけて撮った傑作ドキュメンタリーです。少年たちの4年間のバスケット人生に、人種問題、階級の問題、家族、愛情、競争、孤独など様々な問題を盛り込んで見応えがあります。あとは、ジーン・ハックマン主演の、邦題は『勝利への旅立ち』という映画があって、アメリカのバスケットボールのことがとてもよくわかります。どちらもビデオで見られるので興味のある方は是非見ていただきたいですね。

また、今年の秋には日本で5回目のNBA公式試合が行われます。11月6、7日に東京ドームで強豪中の強豪の2チーム、サンアントニオ・スパーズとミネソタ・ティンバーウルブズがゲームをします。妥協のない真剣な試合が見られることは確実なので、是非見ていただきたいと思います。アメリカの4大スポーツの公式戦が日本で定期的に行われているのはNBAだけなので。チケットは1,000円からあるので、映画を見るより安くアメリカのエンターテインメントを感じられると思いますよ。

\* National Basketball Association

# Day Surgery（日帰り手術）

津崎 晃一

## ▼はじめに

1970年代に米国で始まったDay Surgery（Ambulatory Surgery、Outpatient Surgery、Office Surgeryなどの別称がある）は、医療費抑制のためのマネージドケア（管理医療）の考え方をその発端としたが、患者の安全性と治療の確実性を重視する結果、全身状態に問題のない患者の小手術に対象が限られていた。しかし、1983年に導入されたDRG/PPS（Diagnosis Related Group/Prospective Payment System、診断群別定額払い方式）は、この傾向を大きく促進するきっかけとなり、さらに、内視鏡による低侵襲手術などの新たな手術法の工夫、および短時間作用性薬物の開発や導入、覚醒の速い吸入麻酔薬の出現、モニタリングの進歩などによる麻酔法の改善が、Day Surgeryの著しい適応拡大を生んでいる。ここでは、本邦でもその発展が促されつつあるDay Surgeryについて考える。

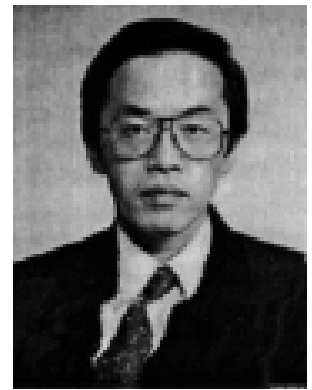
## ▼Day Surgeryとは

Day Surgeryという用語の明確な定義は存在し

ない。しかし、一般には、手術当日に来院し、術後24時間以内に退院するものを指すと考えられている。本邦では、平成10年4月に行われた診療報酬体系の改定において、Day Surgeryの対象に16種類の手術が記載され、手術当日（または、手術内容によりその翌日）に退院した場合には、それぞれの基本点数に500・1,000点が加算されることとなった（表1）。従って、現状におけるDay Surgeryは、原則的には手術当日の退院を意味するが、手術の種類によっては翌日の退院までがこのカテゴリーに含まれている。

## ▼本邦での現状

本邦で行われているDay Surgeryの件数については、正確な調査が行われていないために把握が困難である。各学会などのアンケート調査によれば、30～40%の施設でDay Surgeryが導入されており、特に、私立病院や小児病院にその比率が高いようである。いずれにせよ、本邦でのDay Surgeryは諸外国と比較して少なく、この原因には、いくつかの要因が考えられる。例



津崎 晃一 / つざき・こういち

1953年東京都生まれ。78年慶應義塾大学医学部卒業、80年同大学医学部麻酔学教室助手。マサチューセッツ工科大学機械工学科流体力学研究室リサーチフェロー、マサチューセッツ総合病院麻酔科リサーチインストラクターを経て、94年慶應義塾大学医学部麻酔学教室専任講師、99年同大学医学部麻酔学教室助教授。専攻は麻酔学。

えば、Day Surgeryを導入する上で最も問題となるのは、専用設備や専任人員などのハードウェアであり、このためのコスト負担を考慮すれば、導入率がこの程度にとどまるのは止むを得ないかもしれない。実際、Day Surgery専用の設備を調えている施設は、現時点でも非常に少なく、本邦で行われているDay Surgeryの大部分は既存の設備や人員のまま行っているに過ぎない。また、Day Surgeryを導入する診療報酬上の利点は、平均在院日数の短縮化による加算や日帰り手術加算にある。しかし、このために必要な初期投資負担やランニングコストの増大は、病院経営を圧迫する要因となりうる。さらに、Day Surgeryの導入に伴う既存ベッドの空床化は、これを補填するための患者確保に対する不安をも生じさせる。Day Surgery専用の設備と人員を確保した、いわゆる「集客能力」の高い病院ほど手術患者が集中しやすいという問題が生まれ、患者の「大病院志向」という現在の傾向をさらに助長する可能性も存在する。このように、医療提供側にとっては必ずしも利点が多くないDay Surgeryであるが、患者側には少なからず利点が存在する。医療費負担の軽減や早期社会復帰、入院によるストレス（母子分離など）の回避、生活リズムの維持、院内感染の回避などがその主なものである。合併症や術後疼痛への不安、家族の負担増加などの欠点を差し引いても、患者満足度の高いことが多く報告されている。

## ▼世界での趨勢

Day Surgeryの増大は世界的な傾向を示している。医療保険制度が異なるために、その是非や得失について一概に論じることではできないが、例えば、近年の米国では、全手術件数の70%近くがDay Surgeryにより行われている（この内、白内障に対する眼内レンズ挿入などの眼科手術が約30%を占め、消化管内視鏡手術や形成外科手術と合わせると、全症例の約2/3に達する）。また、本邦では局所麻酔下に行われている手術の多くが全身麻酔の対象となる米国では、麻酔の重要性に対する認識から、Day Surgeryに対す

表1 Day Surgeryとしての加算対象手術\*（平成10年4月以降）<sup>注1）</sup>

| 対象手術                           | 退院   | 加算点数  |
|--------------------------------|------|-------|
| 皮膚・皮下腫瘍摘出術（露出部）長径4cm以上         | 当日   | 500   |
| 皮膚・皮下腫瘍摘出術（露出部以外）長径6cm以上       | 当日   | 500   |
| 舌小帯形成手術                        | 当日   | 500   |
| 腹腔鏡下鼠径ヘルニア手術                   | 当日   | 500   |
| 顎下腺腫瘍摘出術                       | 当日   | 1,000 |
| 顎下腺摘出術                         | 当日   | 1,000 |
| 気管支狭窄拡張術（気管支鏡下）                | 当日   | 500   |
| 気管支腫瘍摘出術（気管支鏡または気管支ファイバースコープ下） | 当日   | 1,000 |
| 胃、十二指腸早期悪性腫瘍内視鏡的粘膜切除術          | 当日   | 1,000 |
| 結腸早期悪性腫瘍内視鏡的粘膜切除術              | 当日   | 1,000 |
| 痔核手術（脱肛含む）根治手術                 | 当日   | 1,000 |
| 経尿道的レーザー前立腺切除術                 | 当日   | 1,000 |
| 胸腔鏡下交感神経節切除術                   | 翌日まで | 1,000 |
| 胸腔鏡下肺切除術                       | 翌日まで | 1,000 |
| 腹腔鏡下虫垂切除術                      | 翌日まで | 1,000 |
| 経尿道的尿路結石除去術（超音波下に行った場合も含む）     | 翌日まで | 1,000 |

\*手術後2週間以内の再入院に対しては算定されない。

<sup>注1）</sup>この改定に基づくが、上記対象手術以外にDay Surgeryを行うメリットは医療提供者側にそれほど存在しない（平均在院日数の短縮化による加算に限られる）。しかし、今後の改定では対象疾患の拡大が予想され、施設によっては、Day Surgeryに向けた体制を十分に整えておく必要があるだろう。

る全身麻酔が、Ambulatory Anesthesiaとして、麻酔学のサブスペシャリティの一つに加えられている<sup>注2)</sup>（ちなみに、米国では1984年にSociety for Ambulatory Anesthesiaが設立され、本邦では1998年に日帰り麻酔研究会が発足した）。しかし、近年では、Day Surgeryを新たに導入する施設数が減少する傾向にあり、市場全体の飽和傾向や鈍化、ベッド稼働率低下による病院経営の悪化がその原因とされている。マネージドケア全体に対する反省期にさしかかった米国であるが、今後とも、費用対効果を追求する姿勢に変化が生じることはないだろう。

<sup>注2)</sup> Day Surgeryにおける麻酔科医の役割

Day Surgeryにおける麻酔科医の役割は、通常の手術における場合、患者の術前評価や術中管理、術後疼痛管理など基本的に変わることはない。しかし、麻酔科医は、Day Surgeryを受ける患者にとって在院中の接触時間が最も長い医師であり、単に麻酔をかけるだけでなく、全身状態に関する周術期コンサルタントとしての重要な役割を担っている。Day Surgeryに対する患者の医学的適性を判断し、適切な麻酔法や麻酔薬を選択すると同時に術後鎮痛や悪心・嘔吐対策について考慮するなど、その守備範囲は広い。

#### ▼将来の展望

昭和33年施行による「新医療費体系」は、医療技術の向上に伴って数々の改定が加えられ、現在の診療報酬体系を生んでいる。しかし、その基本的な性格は当初と大きな変化がなく、高齢者人口の増大や医療技術の進歩に伴う国民医療費の高騰という問題が差し迫っている。このため、診療報酬体系見直しでは、良質な医療の提供と医療資源の効率的活用が基本姿勢として採用され、病態に応じた良質な医療サービスの提供という観点から、医療機関の機能分担化や技術および「もの」に対する新たな評価体系、疾患の特性に着目した評価体系などが考慮されている。従って、現行のいわゆる出来高払い方式を改め、定額払い方式を導入することにより、これら両者の特性を組み合わせた体系が構築されようとしている。すなわち、急性疾患には一定期間の出来高払い方式、慢性疾患には定額払い方式をあてはめ、費用対効果を高めようとする試みである。実際、急性期医療の診断群別定額払い方式については、一部で実施が開始され、その評価が待たれるところである。また、外来・

在宅医療についても促進が計画され、この一部にDay Surgeryが含まれることになる。このような定型的な治療が可能な疾患に対しては、定額払い方式が導入されることになるが、医療の標準化をどこまで進めるかという問題と共に、病床や人員の再配置など、極言すれば、Day Surgeryの推進を通じて、医療提供側のスクラップアンドビルドが求められていると言えよう。

#### ▽Cairns Day Surgery見学記

オーストラリア北部のリゾート都市、ケアンズの中心部近くのCairns Day Surgery (CDS・図1) は、ラリンジアルマスクの研修旅行で訪れたDay Surgery専用の施設であり、一般外科や歯科、口腔外科、耳鼻科、整形外科、産婦人科、形成外科、泌尿器科、眼科、麻酔科を含んでいる。CDSで手術を受ける患者は、まず、それぞれの科の医師のプライベートオフィスで受診し、診断や手術に関する情報を得ると同時に術前検査を済ませておく。予定手術当日、CDSを訪れた患者は、麻酔科医による簡単な問診と術前検査のチェックを受けた後、麻酔科医と共に手術室に入室し、麻酔導入と手術が行われる。麻酔法としては、前投薬はほとんど用いられず、導入はミダゾラムやフェンタニル、アルフェentanil、プロポフォールなどの組み合わせで行い、維持は亜酸化窒素と酸素にセボフルランかイソフルランを用いた吸入麻酔が主体である。Day Surgeryであるために多大な手術侵襲が加わることはなく、また、オピオイドを併用することからも、それほど麻酔薬濃度を必要とすることはない。麻酔中の気道確保は、ほとんどの症例でラリンジアルマスクが用いられ、気管内挿管が行われることはまれである(図2)。換気は人工呼吸器による陽圧換気とし、手術が終了すれば、吸入麻酔薬の投与を中止する。患者の覚醒に関係なく、自発呼吸が出現した段階で回復室(図3)へ移送し、バイタルサインの監視やラリンジアルマスクの抜去はすべてリカバリーナースに任される。一方、麻酔科医は、患者を回復室へ移送後、ナースに簡単な申し送りを行い、次の患者の問診へ向かうといった具合で、これらはすべて流れ作業的に行われる。覚醒後の患者は、しばらく回復室で観察が行われ、回復室の退室基準を満たせば、退院に向けた次のユニットに移送される。



図1 Cairns Day Surgery



図2 ラリンジアルマスクによる気道確保



図3 CDSにおける回復室

従って、このユニットで時間を費やした後、問題がなければ帰宅という経路をたどるわけである。このCDSは、オーストラリアだけでなく、海外からの患者受け入れにも積極的であり、詳細についてはホームページ

(<http://www.accessgroup.com.au/cds/index.html>) を参照するとよいだろう。

# 慰安婦問題の 問いかけているもの

天児 都



元予備役陸軍々医大尉、故麻生徹男氏を父に  
もち、その父親の著書『上海より上海へ』をめぐり、好むと好まざるとにかかわらず「従軍慰安婦問題」と大きくかわる運命にあった産婦人科医天児都氏が、その体験を綴った手記を寄せてくださった。

\* \* \*

——はじめに——

私はこの10年ほど慰安婦問題とかかわり、どんなとも違った経験をしてきました。それは千田夏光という作家に、父が慰安婦制度を考案した責任者のようにほめかされ嘘を書かれたため、平成3（'91）年頃から、民族の恨みを晴らすためとか責任者の娘としてどう思うかなどと様々な人が連絡してきて、ある時は押しかけて来て、それらに対応してきたことです。千田氏はこの著述が誤りであり、今後誤解をまねく記述はしないと平成8（'96）年4月15日消印の手紙で謝ってきましたので、三一書房と講談社に改訂を申し入れましたが、2社とも現在もそのままで出版を続けています。私は、慰安婦問題は千田夏光の誤りを何ら検証せず、事実として平成3、4年頃出版した人たちが誤りを再生産して日本中に広め、それが海外へ流出して不幸な日本叩きの材料とされた事件だと思っています。

——慰安婦とのかかわり——

平成元（'89）年7月11日に亡くなった父、麻生徹男が昭和12（'37）年から16（'41）年にかけて日本軍の軍医として中国戦線にあり、この間に慰安婦と慰安所の写真資料10点と慰安婦に関する論文一篇の第一級資料を残しました。

この資料は昭和12（'37）年12月の南京陥落前後の日本軍の行動が国際問題となってきたので、婦女暴行の対策に主に北九州地区で支度金1000円を払って急遽集められ上海へ行った女性たちと、日本軍が昭和13（'38）年2月に上海に開設した軍直営と民営の慰安所の両方の写真です。

父の死の直後に、強制連行のことを調べているという作家が、母の所から父の資料を持ち出して返却しなかったの、法的手段をとってそれらが使えぬようにしてそれ以来私が父の資料の管理者となりました。

慰安婦のことについては父が昭和32（'57）年博多の情報誌『うわさ』に述べ、昭和52（'77）年毎日新聞の「不許可写真集」に写真5点を掲載していました。父は昭和61（'86）年に慰安婦資料すべてを入れた『戦線女人考など』という本を作り、次に同名の写真集を作る途中で亡くなったので、私はそれを仕上げて100部作り知人らに配りました。この2つの本を合わせて平成5（'93）年8月に『上海より上海へ』を石風社から出版して慰安婦の事実を知って頂くよう努めてまいりました。

最初に慰安婦問題が取りあげられたのは昭和40年代後半から50年代前半の頃です。作家の伊藤桂一や千田夏光の本の出版、テレビ放映、映画制作があり、千田氏の本は当時ベストセラーとなり、今に続くロングセラーです。次は湾岸戦争をきっかけとして、平成3（'91）年に韓国の人々が強制連行の補償を求めて提訴した頃から現在に及んでいます。

父の生前に私が慰安婦にかかわったことは2度あり、最初は昭和20（'45）年10歳の時にはじめて写真を見た時で、2度目は昭和61（'86）年に父の資料をもとに話をした時でした。それから父の死の直後のことになります。平成元（'89）年10月にルポライターが母の所から父の資料を持ち出したのと同じ頃に、東京の不二出版の「十五年戦争重要文獻シリーズ」第一巻『軍医官の戦場報告意見集』に写真10点と手書き論文一篇を入れ、戦争の資料として後世の人に公平に見てもらうことにしました。

平成3（'91）年頃から雑誌やテレビの取材が多くなり、11月28日NHKテレビの「ニュース21」において父の撮影した写真4点が放映されました。平成4（'92）年1月16日に宮沢首相は訪韓の折に韓国に謝罪しました。その前後に私の家の電話は鳴り続け、落ち着いたら12時近いこともあり、日本中の主だった雑誌社、テレビ局、新聞社、政党などから連絡を受けました。この時不思議なことに「これが日本が残した戦後処理の最後のものである。政府に謝罪を要求して一日も早く補償しなければならない」と言う科白を繰り返し聞かれました。昭和40（'65）年に日韓条約を締結し5億ドルの賠償を払っているの、もう税金からは無理と思いますが、あなたは自分のポケットマネーから支払いますか」とある時か

天児 都 / あまこ・くに

産婦人科医。1935年博多で麻生徹男二女として生まれる。1959年九州大学医学部卒業。同大学院医学研究科修了。1967年より福岡市内の診療所に勤務し現在に至る。1983年～93年九州大学医療技術短期大学部非常勤講師。1990年より福岡女学院理事。1991年細胞診指導医（1102号）、1996年より福岡市医師会学術担当理事。日本母性保護産婦人科医会福岡県支部代議員。福岡市YMCA常任議員。1997年より日本産科婦人科学会福岡地方部会評議員。日本歌人クラブ会員。慰安婦に関係のあるものとして、1993年 父麻生徹男の回想録『上海より上海へ』（石風社）出版

1995年12月号「正論」従軍慰安婦と私

1997年7・8月号「現代コリア」慰安婦問題の問いかけたもの——私自身の問題として——

1998年6月発行「九州大学医学部産婦人科学教室同窓会誌第40号（平成9年度）」引揚者の中の強姦妊婦及び性病感染者の保護について

らそれらの人たちに聞いてみました。自分のポケットから出すと言ったのは唯一人で他の人たちはすべて政府が出すべきだ、湾岸戦争にこんなに多額の支出をするじゃないかという答えでした。

慰安婦の性病管理をしなければ多くの人が病気になる、管理をすれば慰安婦の人権問題となるという難しい問題を一面のみから見て議論されているのを聞きます。

今言われている慰安婦問題は、国内での問題をわざわざ対外国の問題にして口火が切られています。多くの人々には忘れられていますが、日本は1853年ペリー来航から治外法権撤廃までの50年間ヨーロッパ諸国の半植民地でその間外国人の慰安婦にされ、昭和20（'45）年の第二次大戦後、国が再び弱体化した時にまた国内で外国人の慰安婦にされました。また中国や朝鮮半島での強姦による妊婦約800人を引揚港で保護して更正させたこともあります。外国との関係で言えば日本人はこうした屈辱を受け、戦争犯罪人と言われ1100人もの人が殺され、それらに耐えて独立を回復してきたのです。

——千田夏光著『従軍慰安婦』正・続篇の誤り——

昭和48（'73）年出版の＜正篇＞には63ヶ所＜続篇＞には23ヶ所問題のある記述があります。この本の取材記事では具体的に慰安婦が商行為であることが述べられているのですが、論文で



故麻生徹男氏

の考察に当たる部分に事実の裏づけがなく矛盾が多くみられます。現在ならノンフィクションのジャンルにはとても入れられないものを、最近の作家たちが事実を検証せずにマゴ引きをして誤りを拡大してしまいました。

問題点をあげてみます。

- (1) 従軍と慰安婦を結んで造語をしたこと——従軍看護婦など軍属の身分を表す用語と並べて「従軍慰安婦」という造語にしたため、従軍には強制の意味が含まれるので、これが容易に強制連行に結びつき、強制連行が性的奴隷を想像させ、現在の混乱のもととなっています。
- (2) 根拠なしに強制連行と結びつけたこと——支度金1000円を払って連れて来たという文中に強制連行されたと書く矛盾があります。
- (3) 娼婦連れて戦った唯一の軍隊として品位を落としたこと——植民地に軍隊を出したヨーロッパ各国やアメリカにも慰安婦はいました。麻生論文の中にそれらの慰安所管理のデータが含まれています。
- (4) 麻生軍医が朝鮮人慰安婦強制連行の責任者のようにほめかして書いたこと——韓国から責任者の処罰などの要求が政府に届いた頃に私は多くの人たちから謝罪しろと言われ叩かれました。父は産婦人科医だったので慰安婦の検診に呼び出され、昭和13('38)年1月2日にそれを行い、1年半後の昭和14('39)年6月30日の軍医会同という軍医の会で講演をして論文を残しています。その中に80名の朝鮮人と20名の邦人を診た記述があるのですが、その論文のために朝鮮人が強制連行されるようになったと千田氏は言っているのです。
- (5) 麻生の論文は娼樓でない軍用娯楽所設立を希望しているのに、千田氏は娼婦は不可欠のものとして読み違えられたこと。千田氏は著書を基に韓国に英語版『慰安婦』のビデオを制作させ世界に流布させています。日本の輸入業者が高校社会科の副教材に輸入をすることでしたが、私が止めました。

——ジョージ・ヒックス著『慰安婦』の誤り——

平成7('95)年10月にヒックス著の日本語版が三書房より出版され、その中には父のことを述

べた部分は少ないのですが、2月出版のオーストラリア版と8月出版のアメリカ版には7ヶ所ドクター・アソウの名が出てきます。ヒックスは日本語はできないと言い、この本はゴーストライターの韓国人Hye Kyung Leeが書いたと言いますが、私はこの人の取材を受けたことはありません。文献が沢山並んでいて索引もついて立派な学術書ようですが、文献は千田夏光の本とそれをマゴ引きした著書のものばかりです。

7ヶ所のうち8ページには「おそらく後の最も健康な慰安婦供給源への基礎をおくのに手助けした」として父を紹介し、138ページには「上海の慰安所の主唱者」とまで書かれています。

またオーストラリア版、アメリカ版と日本版に父の写真が無断使用されていて、英語版では版権者がDong-A-Daily(東亜日報という韓国新聞)となっていたので、手紙を送って返事を待っている時に国連人権委員会でクマラスワミ報告がtake noteとなったニュースを聞いて驚きました。クマラスワミ報告の事実関係の供述はヒックス著書によるものと知ったからです。無断写真使用には著者と出版社に国際弁護士事務所を通じて再度手紙を送りましたが返事をよこさないの催促してもらうように弁護士に頼みましたが、これ以上すると裁判になり慰安婦問題に立ち入り、日弁連はあなたと立場が違うから弁護できないと言われました。東亜日報に抗議した分は東京支社長の裴仁俊<sup>イ・ベンジュン</sup>氏が電話で謝罪してきました。

——宮沢首相と河野官房長官の謝罪と強制連行を認める発言の訂正——

平成4('92)年1月宮沢首相は訪韓の折にソウルの日本大使館にデモ攻撃をかけられ慰安婦問題で韓国に謝罪をしてしまいました。平成5('93)年8月4日の河野官房長官の発表の調査資料には強制連行を思わせる証拠らしいものは含まれていません。

平成9('97)年1月31日片山虎之助議員の質問に平林博外政審議室長が「政府が調査した限りの文章の中には軍や官憲による慰安婦の強制募集を直接示するような記述は見出せませんでした。たゞ総合的に判断した結果一定の強制性があるということで、先ほどの指摘のような官房長官の談話の表現になった」と答え、3月12日小

山幸雄議員が詳細な質問を行い発表前後のことが明らかにされました。

しかしその後も大手出版社が相変わらず強制連行の中の慰安婦記事に私の写真協力を求めてきたのでお断りしました。

日本は戦争中に労働力確保のために徴用を行っていましたが、その中の朝鮮人だけを取り出して強制連行という言葉でくることが妥当なことであるか検討してみる必要があります。

——私自身の問題として——

私がこの10年間でやってきたことを述べます。

- (1) 資料使用のための条件を守ってもらうこと。
  - 1) 歴史資料である。性的興味をそそるような使用はしない。
  - 2) 民族間の紛争をあおるような使用はしない。
  - 3) テレビや雑誌などの発表に適さないものは使わない。

資料使用にこの3つを主張してきました。

- (2) 文書館や資料館を作って、誤った世論操作をさせない。資料を盗む者がいたので、公表の徹底をはかるよう努めてきました。
- (3) 歴史の問題を世界に通ずる言葉で語ること。
  - 1) 慰安婦のことは日本の約百年の売春の歴史との関連で見てゆくことです。
  - 2) 自分の国を語るとき、世界の植民地政策の歴史を軸にして、明治維新以降を自国の外交史の立場で話しています。

どの国の人もそうなので、すぐに理解されます。イデオロギーの付いた学問は初めに結論があってそれに都合のいいように資料はつまみ食いされ曲げて使われます。事実を積み上げて結論に導く科学的方法をとるべきです。

私の個人的努力も限界に来たと思われることが起こりました。それはこれほど問題のあることを中学校の教科書に載せたことです。ヨーロッパ諸国、アメリカにも慰安婦はいたのに何故日本だけがこんなバランスを欠く教科書を作ったのでしょうか。改めてゆくべきです。

国連の周辺で慰安婦をsex slave、慰安所をrape centerなどとする訳語が出るようになり、本当のレイプと慰安婦を区別する必要があると調査をしました。レイプの20%が妊娠にいたると

ドイツの統計は語っていますので、少なくとも推計4000人が戦後日本への引揚げの途中でレイプの被害を受けたことになります。これらの人たちは日本のこうした混乱を悲痛な思いで見守られていることと思います。

——おわりに——

私たちは慰安婦問題を正してゆくことが必要です。そのためにはまず自分の国の歴史を正しく知ることです。アメリカや中国の人の目で日本を見て自国を貶めている人たちが多くいるのは驚きでした。こどもたちの歴史の教科書は極東裁判のアメリカのマインドコントロールのもとにあり、私たちは自分たちの手で子や孫に本当のことを伝えてゆく必要があります。アメリカのヘレン・ミアーズは1948年に『アメリカの鏡・日本』（メディアファクトリー刊1995）を書きマッカーサーに発禁にされましたが、戦後50年間に日本に欠けていたのはこのような人ではないでしょうか。政治の道具にされず、深い洞察力をもつ学問の基礎が日本に築かれることを願っています。

慰安婦問題を利用してきた人たちが沢山います。国内ではどんな人たちがもうおわかりでしょう。国外では日本叩きをする人たちです。平成9（'97）年アメリカで中国系アメリカ人アイリス・チャンが『レイプ・オブ・南京』を出版し話題となりました。このように日本の歴史に対する間違ったことが世界中に流布している現状です。日本人自身が自ら歴史を知らず、こうした中傷に迎合する人たちがいますが、誤った中傷や非難に自身で反論できるぐらいの人がもっともっと欲しいと思います。

今、歴史学と文学との混同があります。慰安婦問題は性の攻撃性と自虐性のどちらも多く含んでいるので文学のいいテーマでしょう。歴史がきちんと学ばれていないところでは、嘘がとめどなく広がってゆきます。平成11（'99）年3月アカデミー賞短篇ドキュメンタリー賞が伊比さんという若い日本人女性に与えられ嬉しいニュースでしたが、彼女は「従軍慰安婦」をテーマに映画を撮りたいそうです。若い人たちに歴史の事実を知らせる努力を続けねばならないと思っています。私たちの尊厳を守るために。

（'99.4.15）

\* \* \*

弊社と天児都先生のご縁を知っていただく上で、先生の義理の父上であられる故天児民和先生が、東機質20年史（1974年刊）にお寄せくださった手記が役立つと考え、ここに転載させていただきますことにした。

東機質創立20周年に当りて  
（1974年刊『東機質20年史』より）

九州大学名誉教授  
九州労災病院院長 天児 民和

東機質が、20周年を迎えられるときいて年の流れの速さを感じるが、しかし20年という年月も、特に敗戦の直後にはじまっているだけに感慨深いものがある。

佐多保之社長（注：現社長保彦の父）とは考えてみると随分長いおつきあいである。佐多さんのお父さんと私の父との交友から数えて行くと、もう80年に近い関係である。私の父は、阪大の前身大阪医学校と言われた時分の卒業生である。そして、長らく神戸に住んでいた関係上佐多さんと大変親交が厚かった。そんな関係で、私の長兄の結婚の仲人もしていただいたし、私の結婚式にも出席して祝辞をいただいた。

当時は、大阪大学の学長をお勤めになり、名実ともに今日の大阪大学の基礎をおつくりになった。元来病理のご出身で、若い頃九州大学の開設当時、即ち明治36年講師として、九大の第1回から3回生までの講義を受けもっておられた。その当時九大病院の前は、千代の松原で大きな松の林でキツネが出たという話を直接承ったこともある。大阪では結核の研究を進められ、阪大に肺病科を創設せられた方で、現在の山村内科はそのあとを継いでいる筈である。現在、阪大医学部の前に大きな胸像が立っている。その前を通るたびに、佐多社長がお父さんにだんだん似てこられるように思われる。お父さんは学者としても一流であったし、学長としても第一級の学長であった。その性格、その能力をそのまま受け継いでいるのが、佐多社長ではないかと思う。

私と社長との出会いは戦争中である。昭和14年には、私は応召になり大阪堺市の金岡陸軍病院に勤務した。私は、35歳でもう頭が大分禿げていたが見習士官で召集になった。その当時、金岡の陸軍病院に澁刺とした軍医少尉がいた。それが佐多さんであった。あちらは少尉で、こちらは見習士官、階級がものいう軍隊では何かとお世話になったが、昭和16年社長は外地に出てしまわれたが、私は東京の第1陸軍病院に転任になった。それから暫くお逢いすることもなかったが、戦後、東京に出てきて商売を始めるという話を聞いて驚いたり感心したりした。

終戦当時、私は、新潟医科大学にいたが、昭和25年九大に帰ってきた。その頃から日本にも本格的な麻酔が始まり、麻酔の勉強に多くの人が米国に留学した。それらの留学生の情報では、米国のフォレガー社の麻酔器が一番よいという話であったが、その輸入を一手に東機質がひきうけることになった。これがそもそも成功の第1歩である。これには、義兄の三宅教授と古川教授お二人の援助も大きな力になったと思う。元来社長は、戦争中でも最高級の長靴をはいていたし、いつも着るもの、食べるもの何でも第一級品を選んだ。われわれ貧乏人にはちょっと驚異であったが、その性格が商売の面にもよく現れている。東機質の品物は高いがすべて世界の第一級品である。安物は扱わない。もちろん高いので買う時には少々ためらうが、買って後悔することはない。これが佐多商法の成功の秘訣であろうかと思う。安物買いの銭失いという言葉がある。東機質の品物は高いが安心して買える品物であるといつも私は感じている。ただ、私の病院の予算がいつも削られているので、折々買いたくても買えないことがあるが、そんな場合は涎を流しているわけである。

最初商売を始められた頃には細菌学者で医学博士では武士の商法というようなことにならないかと、多少の心配をしながら眺めていたが、なかなかどうしていつの間にか医療機械の輸入商としては第一流になってしまった。これは何ごとも、最良品を求めようとする高い理想と、そのために得た信用の結果であろう。恐らくは今後も益々発展せられるであろうが、長い間続けてこられた最高の品という態度を、崩されないようお願いしたいものである。

# スイス学校便り

思考力、表現力、説得力が教育の基礎

米川 恵子



米川 恵子 / よねかわ・けいこ  
1979年京都生まれ。1993年よりスイス、Zurich（チューリヒ）郊外のZumikon（ツミコン）市に在住し、現在Zurich州立Stadelhofen（シュタデルホーフェン）高校ラテン語科に在学中。

米川恵子さんは、1994年12月から1年間にわたりスイスから本誌に現地の医療事情をレポートしてくださいました。チューリヒ大学医学部脳神経外科主任教授米川泰弘先生の次女である。14歳の時にスイスに渡り現在高校に通う恵子さんが、学校での体験を綴ったお手紙をくださった。日本とは対極にあるように思われる授業の様子などが、高校生の目を通して生き生きと語られて興味深く、今回ご本人の許可を得てここに紹介させていただくことにした。

父の転任に伴いスイスにやってきてから今年で7年めになります。楽しくてたまらなかった日本での中学生活、言葉もわからない外国に移り住むことに不安を感じていた頃が、今では懐かしい思い出です。きょうは少しこちらの学校生活についてお知らせしたいと思い、ペンをとりました。

スイスに来て最初の2年間は英国系のインターナショナルスクールの中等部に通ったので、初めは片言だった私の英語も、だんだんと日常会話に支障がなくなり授業にもついていけるようになりました。世界各地から来ている友達と、熱心な先生たちに恵まれたこともあり、次第にこの学校も私にとって日本で通学していた同志社中学に負けない位楽しく居心地のよい所となってきました。そのまま学んでここで高校課程を修了することもできたのですが、同志社を去る時と同様の非常になごり惜しい思いを味わいながらも一大決心をしてこの学校とも別れを告げ、チューリヒ州立のギムナジウム（高校）を受験することにしました。現地の言葉（ドイツ語）を話したり、現地の友達を作り、現地の教育を体験したかったからです。現在はその高校の4年生です（スイスの高校はなんと4年半もあるのです）。

さてこちらのギムナジウムは5つの系統に分けられています。古代ギリシャ語及びラテン語が中心の古典科、ラテン語が最主要教科のラテン語科、自然科学教科が中心の理数科、語学（独、英、仏、伊、西語等）が主要教科の語学科、及び経済教科に重点がおかれる経済科です。私はその内、ラテン語科を選んだのですが、その理由はこの科の卒業者は、大学進学の際、制限なくどの学部でも専攻する自由があるからです。授業でシーザーの『ガリア戦記』やキケロの文章の訳に取り組むうちに、ラテン語はドイツ語だけでなく、フランス語、イタリア語等のたくさんのヨーロッパの言語の語源であるということ

がリアルに実感でき、学習に興味が出ました（当科ではフランス語、イタリア語も必修科目です）。また、ヨーロッパを旅行すると、古代ローマ帝国の影響の偉大さを物語る様に、由緒ある教会では必ずといってよい程ラテン語の文句が刻んであるのを目にします。現代においてはもう話されないが故に「死語」と呼ばれているラテン語ですが、実はヨーロッパの言語や文化の底流にかけがえのない大きな土台として今も生き続けていて、その奥深さを思い知らされます。

ところで、こちらの学校で、学習の際に最も求められるものは日本とは根本的に異なっています。例えば、最近のドイツ語の授業では「迷路」という題で3時間作文を書くという課題がありました。ある一つの物事をどれだけ多くの様々な観点から見るができるかが問われ、評価されるのです。歴史のテストでは、例えばある歴史上の人物の発言（教科書にも出ていない初めて目にする文章）を与えられ、「これはいつ誰がどのような状況のもとに述べたものか」、「歴史上にこれに似た状況があったか」等を自分の知識をもとに比較考察しながら書かなければならない問題があります。また、テストの点数だけでなく、授業中に自分の意見を発表する力と、その説得力が重視されます。どの科目でもペーパーテストの点数のみがそのまま成績になることはなく、必ず、どれだけその生徒が授業や討論に積極的に参加したかの点数も加味されます。その配分が先生によっては半分ずつの時もあり、生徒は授業中眠ってなどおられず、終始全身で注意を払ってチャンスを逃さず手を挙げなければなりません。日本の、静寂に包まれた授業風景とは対照的で、受け身でいてはためなのです。更に毎学期末には生徒一人一人の全教科の成績の平均点が計算され、もしそれが学校指定の基準を下回っている場合、その生徒は次学期から“恐怖の”試験期間（いわば執行猶予みたいなもの）に入ります。そして、次の学期も引き続

き成績が基準を下回ると、情け容赦なく留年または退学させられます。中にはその結果、卒業時に、入学時の半数近くに減っているクラスもあります。以上の例が物語る様に生徒に求められているもの、在学中に徹底してたたき込まれるものは知識の丸暗記ではなく、自分で考える力、そして自分の理論を的確に表現し、他人を説得する力です。

最後にスイスという国について少し書かせていただきたいと思います。スイスは永世中立国であり独自の歩みを大切にするため、EU（欧州連合）には現在のところ加盟していません。1999年からはEU加盟国内でユーロ通貨が導入され、スイスの経済的、政治的孤立が憂慮されています。国内には旧ユーゴスラビアやアルバニアからの難民が急増し、仕事のない難民が不満と貧困から起こす犯罪も比例して増えています。島国の日本と違い、複数の国と国境を接しているので外国人が多く、私はこの6年の間に、色々な民族の人と出会いました。母国が戦争中で帰りたくても帰れない難民、混血で自分のアイデンティティーがわからなくて悩む人、ブラジルで生まれ、スイス人の養子となり母国を知らずに育った人。私は来年高校を卒業しますが、人の幸せに少しでも貢献できる仕事につながる勉強を大学でしたいと思っています。

それでは、またお便りします。皆さまお元気で。

# 京の歲月

壽岳 章子

本誌1997年7月号の巻頭インタビューにご登場いただいたアレックス・カー氏は、その著書『美しき日本の残像』の中で、「残念ながら京都という町は“病氣”です。京都の伝統芸術・文化の中核を訪れると、そこで見られるのは大理石のロビーにシャンデリア、びかびかのインテリアです」と書いている。京都の町こわしが急速に進み、「もう京都に美しさは残っていない、京都の美しさはもう日本人の心の中にあるだけになってしまったのではないか」とも言う。今回は、親子二代\*古きよき京都の町とともに生きてこられた壽岳章子さんに、京都の魅力、京都への思いなどを語っていただいた。

\* \* \*

来日中のシラク大統領が、セーヌ川にかかる Pont des Arts (芸術橋) を模した橋を鴨川にかける提案をしたのは1996年11月だった。1998年の「日本におけるフランス年」と京都・パリの姉妹都市盟約40周年を記念したこの提案は、市によっていったん受け入れられたが、その後、景観論争、市民の反対運動などに発展して市政のあり方自体が問われることになった。議会で予算を議決した後に計画を撤回するのは異例のこと。京都市では88年3月に廃止された古都税以来のことだ。

——これが芸術橋を巡っての事の顛末ですが、渦中で体験されていたかがでしたか。

「あれは市民総ぐるみという感じでした。反対運動のクライマックスは、忘れもしない1998年5月30日。集会をやるといったら、河原に後から後から人が集まってきた。組合を通すなどいわゆる組織動員をやらなかったのに、ひとりで集まってきました。私がその大会の音頭取りをやりまして、京都人のパワーを実感できておもしろかったですよ」

こうして、同年8月、「市民理解のない着工は多大なマイナスを及ぼす」として市によるこの計画は白紙撤回された。

——新しい京都駅は日本全国で最も大きな駅ビルをもっているそうですね。

「今京都には人をドキッとさせるようなもの

がたくさんありますが、京都駅はその最たるもの。ホームに行くためにはちょっと入るけれども、絶対上にあがらないんですよ。ホテルもできたでしょ。そこでよく会合があるんですが、私絶対行かないの。高いビルを建てるな、と演説したことがあるので、今も足を一歩も踏み入れない。だんだん世間が狭くなるの。たいへんよ、操をたてて生きるの(笑)」

——京都の人たちは皆、壽岳さんのように考えられないですか。

「京都には市民運動の団体が100以上あります。私は町並みを守る会というのもやっていますが、結局、それを上回る無関心が大勢いるということですね。意外と平気な人が多い。だから革新が選挙で負ける。政治の話はあまりしたくないけれど、京都は20年ほど前に革新が負け出してからダメになりましたね。町の変り方が激しくなりました。京都では、文化的なことも含め、革新が保守なんです」

——無関心の理由は何なのでしょう。

「あまりにも京都というところに慣れすぎてしまったんじゃないですかね。のんびりしているというか、平安時代からの歴史において大して変わらなかったのだから、自分が何かしなくても、何も壊れたりしないと思っている。どんなにたいへんなことになるかわかっていない。ヨーロッパは陸続きなのでいつ国境を越えて攻めてくるかわからないけれど、日本はそれがなかったから、長い間なんとなくやってきているでしょう」

私はもちろん平和主義者ですから、戦争がなくなったことは本当にうれしく思いますよ。けれどもその平和の中で、美しいものを育てるとか、ちゃんとした伝統を育てていくとかいう積極的な働きかけがなければいけないと思います。怠け者的な平和思想が流行っているのではないかしら。環境保護などにしても、例えば森林破壊を防ぐためには、本当に辛抱して森を残していくという強い決意が必要ですね」

——「わび」「さび」「風流」など、日本人がかつてもっていた文化に通じる心が失われてしまったようですね。文化を大切にできる余裕がなく



壽岳 章子 / じゅがく・あきこ

大正13(1924)年京都生まれ。昭和21(1946)年、東北帝国大学法文学部卒業。専攻は国語学。昭和62年、36年間教鞭をとった京都府立大学を停年で退官。専門は、中世日本語学と言語生活史。女性史にも関心が深い。『レトリック』(共文社)、『日本語の裏方』(懇談社)、『日本語と女』(岩波書店)、『京に暮らすよろこび』『京都 町なかの暮らし』(草思社)など著書多数。

なっているように見えます。文化とは、その国に住んでいる人の生き様そのものとも言えるでしょう。文化に対する日本人の無関心、無神経が、陰湿ないじめ、援助交際などを生み出す遠因にもなっているのではないのでしょうか。

「確かに精神性の喪失を感じますね。日本人は、仏様にしても神様にしても、すべて何とかのためとか、どうしてほしいとか、利得のために拝む。本当の意味での宗教的な豊かさというものがなく、交通事故に遭いませんに、試験に受かりますように、自分自身のため、自分の家のため。これでは、文化を大切にできる心もなくなってしまいますよね」

日本人というのは、なんというか、おつちよこちよいのところがあるでしょ。日本を舟にたとえれば、こち行つて騒いで、あち行つて騒いで、舟がいつも傾いている。落ち着いたところがないのね。一時的な流行というものにとびついて大騒ぎをする。どんどん変わっていくものに対応するのは楽しいし、いいことでもあるんだけど、「ばっかり文化」でしょ、日本人は。もともとそういうところがあって、戦前まではそれが抑えられていたけれど、戦後一気にバーツと出てきたんじゃないですか。なんか子供っぽくて、うーんと腕組みをして物事を見守るような精神に欠けるような気がしますね」

——戦後急激にアメリカの資本主義が入ってきて、日本人はいつのまにか、利益第一、儲ければいいという国民になってしまったのかもしれないね。

「京都の繁華街、河原町通りのようなあんなむちゃくちゃな所はないと思うのね。赤、白、黄、もう見てられないような無様な通りになっています。日本人の、儲ければ何をしてもいいという利益第一主義で、そこにお店を出せば儲かる、他のことはどうでもいい、それで京都の町並みもずいぶん破壊されたと思います。西陣方面の小さなお店、工房なども駐車場やワンルームマンションになってしまう」

「パリみたいにしたらいいと思うんですけどね。古い町並みはキチッと守って、そればかりではだめなので、高いビルはちょっと離れたところに地域を定めて集める。京都の南の方に空き地があるのでそこを利用するなどしてね」



——ヨーロッパの街は、国と国民がいっしょに古い町並みを保とうと努力していますね。それがまた国民の誇りともなっています。フランスでは、歴史的記念物には相続税がかからないそうです。持ち主はそれらを維持していくだけでかなりの費用を負担しているからです。

「税金には本当に困っています。京都には特に重要文化財でなくてもいい建物がいっぱいあるのに、相続税をなんとかしないとみんな細切れになってしまう。それでお金儲けをするわけでもないのだから、そのままにしておいてくれればいいと思うんですが。京都は本当にがんばらないと、京都市的なものがバラバラになってたいへんなことになりますよ」

—— これからの京都は？

「町は変わっても、人はなかなか変わらないものです。これまで何も変わらないものと思って悠長に構えていた京都人も、危機感をもって積極的な平和主義者になってほしいですね。古きよき京都を知っている人たちの中に望みの綱があると思っています。

京都だけがもっている産業が今でもずいぶんあります。織物にしても、塗り物、陶器にしても、日本文化の粋を集めたようなものがたくさんあります。これらの人の心にしみ入るようなもので、京都は京都であり続けたいですね。簞小asa 箆とが机などのミニチュアを全部実物と同じように作っている職人さんがいましてね。かわいらしい下駄箱や針箱などもあって、引き出しには全部引き手もついているんです。何の役にも立たないんだけど、ちっちゃく作ってるの。そういう物を作っている限り、戦争もなし。

文化を大事にする心はそういった目に見えないところで育まれるんだと思います。後継者不足が叫ばれるようになって久しいですが、この不景気ですからね。若者が戻ってきている所もありますね」

—— 久しぶりに京都へ行ってみようと思いついた人に、何かアドバイスをありますか。

「名所などはどうぞご勝手に見てください。例えば清水寺などはやっぱりいつ行ってもすばらしい所ですよ。けれども、例えばなかぞう 中京あたりのいろいろな通りを歩いて、そこらへんのご飯

を食べて、昔の面影が残る問屋なんかでお店の人と話をし、四条通りに出る。そういう京都はまだ生き生きしてます。京都は縦横に深みのある大きな町で、そこに住む人たちの暮らしを支える多くのいい通りがあります。京都の人たちはちょっと警戒心が強いところがあるけれど、本当はいい人なのよ。安心してお話してください。

もう大正時代くらいからのめっぽう古い家が貸家になっていることが多くて、それらはとても安く借りられます。事情の許す方は、しばらく京都で暮らしてみてもどうです。確かに町の破壊は深刻に進行しつつあります。でも京都には、それに立ち向かう十分な歴史の重みがあると思いますね。歩けば必ず何かの発見がある、底力のある町なんです」

\* 父上は英文学者壽岳文章氏、母上の静子さんも『朝』『歳月を美しく』などの著書をもつ文筆家。

#### 表紙の写真

ロバート・バイヤース作品



Tree Stump, Tokeland, Washington, 1987

「樹」は生命の象徴として、よくモチーフに取り上げられます。幹は天へ、根は地へと、天と地を結ぶ架け橋のように、どっしりとした存在です。この作品では「樹」は抽象的に捉えられており、フォルムは光によって変幻自在に様をなし、樹皮や木肌は綿密に描写されています。これも写真ならではの表現と言えます。

#### 写真展のご案内



© Chris Steele-Perkins / Magnum Photos  
"Walking in Nomansland" Boys in the Rain, Lesotho, South Africa, 1981

#### P.G.I. (虎ノ門)

7月13日(火) — 30日(金)  
David Perry "HOT-ROD"  
デビット・ペリー 作品展「ホット・ロッド」

8月3日(火) — 9月10日(金)  
Chris Steele-Perkins "Walking in Nomansland"  
クリス・スティール・パーキンス 作品展  
\* 8月16日(月) ~ 20日(金) 夏期休館

9月16日(木) — 10月29日(金)  
奥村光也 作品展  
Mitsuya Okumura "Angle of Silence II"

— フォト・ギャラリー・インターナショナル(虎ノ門)  
東京都港区虎ノ門 2-5-18 Tel. 03 3501 9123  
月 - 金 11:00 - 19:00 土・日・祝 休館  
地下鉄銀座線虎ノ門駅下車 2番出口より徒歩5分

#### P.G.I. Shibaura (芝浦)

6月22日(火) — 7月31日(土)  
鈴鹿芳康 作品展「風曼陀羅」  
Yas Suzuka "Wind Mandala"

8月3日(火) — 9月14日(火)  
Huntington Witherill "Photographs"  
ハンティングトン・ウィスリル 作品展

9月20日(月) — 10月30日(土)  
普後均 作品展「見る人」  
Hitoshi Fugo

— P.G.I. 芝浦  
東京都港区芝浦 4-12-32 Tel. 03 3455 7827  
月 - 土 11:00 - 18:00 第2・4土、日、祝 休館  
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分  
ゆりかもめ 芝浦埠頭駅より徒歩15分

# 出会い (10)

はざま  
東西文化の狭間

奥村 一郎



## 南仏の修道院

雲一つなく、眩しいほどの初夏の日射しに覆われた静かな濃紺の海に、ゆったりと純白の巨体を浮かべるマルセイエーズ号に乗船、横浜港を出帆したのは、1951（昭和26）年5月13日、日曜、カトリックの典礼では、聖霊降臨の大祝日であった。さすが、カトリック国フランスらしいなどと思いながら旅の無事を神に願いつつ見送りの友人と別れたのは、もう遠い昔のことになってしまった。

約一か月にわたる、はじめての異国への船旅は、日本人も少なく、未熟な語学力などのために、さまざまな失敗、途中の寄港のたびに珍道中を重ねて、ようやく南仏の港マルセイユに到着した。私にとって、はじめて見るフランスの街、マルセイユでの数日は、今なお、新鮮な思い出となっている。特に、緑が少なく、茶色に乾いた土と砂で盛られた高い丘の上から、青い地中海を見守る真っ白の聖母像（Notre Dame de la garde）の足下に立って眺めた海と街の光景は忘れられない。そこに、二日ほど滞在、その後、ローヌ河が地中海に流れる河口近くの鄙びた街タラスコン（Tarascon）に向かった。聖書にでてくる聖女マルタがその街まで来たという伝説からなのか、今もその街の保護の聖人として親しまれている（ルカ10,38-42）。その小さい駅まで車で出迎えにきてくれたF神父が、私にとって、はじめて出会うカルメル会士であった。今の日本では到底見られないボンコツ車に乗せられ、そこから二十分ほどのところにある修道院に着いた。「小城（Petit Castelet: プチカストレ）」といわれる、二階建ての古い建物。玄関でドミニク院長をはじめ、十五名ほどの修道者に温かく迎えられながら、用意されていた修室に通された。古い小さな木机と腰掛。三枚の長板の上に載せられた固い藁のマトラス。あとは何もない至って簡素な部屋。こうして、まだ卵にもならない修道生活が、次第に軌道に乗せられていく日々となっていった。

紙面に限りもあるので、まず、最初のカルチャーショック（culture shock）の生活体験をいくつか紹介することにとどめたい。

### 1. いちじく採り：ハイ（Oui）とイイエ（Non）

台所の近くに大きないちじくの木があった。ジャム作りのため、その実をとるように、修練長から言いつかった。木の枝が長くの

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンズ宗教研究所）など多数。

びて、そばの納屋の屋根までかかっていたので、棒をもってその屋根に登り、今にも落ちそうな屋根瓦の縁を歩きながら、いちじくの実をちぎってはカゴに入れていた。その時、オランダ人の修練長が下を通りながら、私を見上げ、下から大声で叫んだ。「落ちるな（Ne tombez pas）!」。そこで、「ハイ（oui）」と私は答えた。と、途端に、「バカ（Stupide）!」と、修練長が怒鳴った。私は、なぜ怒られたのか、すぐには分からなかった。否定形の命令や疑問の場合、日本語と欧米語では正反対になることを、その時、身にしみて知った。日本でのフランス語の勉強で教わっていたはずなのに、こんな初歩的なことも、実際となると慣れるのが容易ではない。この頃のように、多くの日本人が英語を習う時も、例外なく体験するはずのこと。言語構造と密接に結びつく精神構造の興味深い違いがそこに見られる。

ところで、いちじく採りぐらいのことなら、深刻なことではないが、同じことが別の形で起きてきた。



1955年2月ローマ・カルメル会総長館応接間にて

## 2. 哲学教室

その頃、まもなく一年先輩になる二人の日本人神学生が合流、一緒に、哲学の授業を受けることになった。先生は哲学者の院長殿であった。最初の講義は、日本でも良く知られている、E.カント哲学の批判。すなわち、「純粋理性批判」と「実践理性批判」にもとづく「不可知論」について。英語で「agnosticism」といわれる。つまり、純粋理性では、神の存在を証明（独demonstrieren）することはできない。実践的、または、倫理的側面からのみ、神の存在が要請される（独postulieren）と、カントは主張した。自身は敬虔なプロテスタントであったために、神を完全に否定できなかった。最も美しいものは、夜空の星と自分の心の奥深くにある道徳律である、という有名な言葉を残した。つまり、カントの神は、倫理の神であって、存在の神ではない。この微妙な区別は、カトリック神学からすれば、異端説とされ、教会の禁書目録に入れられた。

講義のはじめに、この難しい問題が取り上げられ、「神の存在は理性によって証明できない」という、カント理論を反駁することに終始した。ところで、その頃、カントの緻密な新説が流行になっていた日本の大学知識を、それなりにもっていたわれわれは、下手なフランス語で、生意気にあれこれと大先生に質問したり、反論したりした。そこで、例の言葉の応答形式の問題が否応なくでてきた。話が熱中してくると、Oui（ハイ）と、Non（イイエ）のやり取りがますますおかしくなり、先生もわれわれ生徒も頭が混乱してしまった。そこで、院長先生の方からの命令がでた。「君たちは哲学を学ぶ資格がない。まず、フランス語の勉強をしろ」と、それで哲学教室は初回で終わり。先ず、フランス語の勉強をということになってしまった。

## 3. フランス語教室

第二次世界大戦の時戦闘機のパイロットだったF神父が先生。まず、私たちの実力の程をみるため、何か作文を書いて提出するようにと命じられた。仲間の二人は何をだしたか思い出せないが、私は、「一羽の雁」という題で短い童話のようなものを書いた。ストーリーは至って簡単。「仲良しの少女と少年、マリー（Marie）とジャン（Jean）が野原で遊んでいたところ、怪我をした一羽の雁が足元に落ちて

きました。二人は一生懸命、手当てをしてやりましたが、とうとう、雁は死んでしまいました。そこで、小さいお墓をつくって、そこに可哀相な雁を納めてやり、天国に行けるようにと、一緒に祈りました」

さて、神父先生いわく、「この話は、神学的にいつて間違いである。雁などの動物には靈魂がない。天国に行けるように祈るなどというのは、全くナンセンス」と強調。まさに、カトリック神学を支えるスコラ哲学の盲点丸出しの論理で、日本人の自然観とはおよそかけ離れた幼稚な批判に、開いた口もふさがらない。残念ながら、まだ反論するだけの語学力もなく、三人は互いに顔を見合わせて黙っているしかなかった。文字通り、パンチの効いたカルチャーショック。その後にも、これに類したことが少なからずあった。

それから、半世紀を経た今日では、生態学や生活環境についてのエコロジー（Ecology）が著しく発展するとともに、自然と人間との関係をホーリックに把握する東洋哲学を軸とする「調和の神学」が芽生えようとしている。幸いなことである。

# 女性はワイン・テイastingにおいて男性より優れているか？

横山 弘和

## ——ワイン業界への女性の進出——

今や、あらゆる職業で女性の活躍がめざましい時代になりました。新聞の報道は、毎日のように様々な女性の新しい職場への進出を取り上げています。世のしきたり、体力の差、単なる偏見などで、最近まで女性の進出が限られたり、女性を絶対受け入れなかった分野が、一斉に門戸を開放し始めたかのようです。また、文部省の統計数理研究所が最近行った「国民性調査」は、男女の能力差について、「差あり」の44%に対し、「差なし」が50%と、「差なし」が初めて逆転した結果を発表しています。これは、世界的な傾向で、21世紀には初の女性アメリカ大統領も登場するでしょう。

このような世の変化や進歩は、ワイン業界にも大きく影響しています。ワイン生産の過程における作業には、原料葡萄の栽培、収穫、発酵、熟成、出荷などがありますが、これらの分野で非常に重要な職種にエノロジストがあります。例えばカリフォルニア大学デイヴィス校は、近代醸造学の研究で高い評価を受けている学校ですが、ここで葡萄栽培学や醸造学を学び、ワイナリーの責任者として世界中のワイン生産地で活躍する技術者の中にも、数多くの女性が含まれています。

また、ワイン知識の普及という過程で、ワイン・ジャーナリストあるいはワイン・ライターと呼ばれる、ワインに関する著述、評論を職とする人々がいますが、ここでも多くの女性が活躍しています。特にイギリス人に優れた女性が多く、現在の世界的なワイン消費の広がりによって彼女たちが果たした役割は非常に大きいと思います。

更にワインの流通には、専門知識を生かしてワイン・ショップやデパートの洋酒売場で実際お客様と接し、相談に応じるセールの仕事があります。この分野は特に女性に向けた職業と言ってよく、私も経験豊かな素晴らしい人を何人も知っています。

そしてもう一つ、ホテルやレストランで、お客様の注文した料理と合わせたり好みを聞いてサービスする、今ではすっかり馴染みになったソムリエという職業があります。女性はこの部門でも、立派な優れた業績を上げています。

## ——女性ソムリエの誕生——

さて、日本におけるワイン・サービスの本格的な専門職「ソムリエ」は、初めは男性の仕事として、1964年東京オリンピックが開催された頃に誕生したと思われます。戦前からあった名門ホテルでは、それ以前にもヨーロッパの高級葡萄酒を輸入しサービスはしていました。しかし、その頃ポートワイン、葡萄酒などとして売られ、しゃれた飲料として人気のあったのは、色付け、味付け、アルコール添加の甘い飲料でした。現在ワインと呼ばれ流通しているものとは大違いの飲料で、ちょっと飲み過ぎると間違いなく悪酔いして頭の痛くなる代物でした。一説によると、その中身を分析すると、本当の葡萄原液は10%も入っていなかったと言われていました。そのような時代に、今は常識として考えられている「本物ワイン」は、高級ホテルでも特別のお客様が、特別の席で飲む、特別に高価なものでした。そんなわけで、ホテルの従業員の中でも主任クラスに扱いに精通した人がいましたが、正式にソムリエを職名として働いている人はいませんでした。私がホテルに就職した時に面接した人事課長さんは私に「あなたはちょうどいい時に来た。新しい職種でワイン・パトラー（イギリスではそう呼ばれていました）という仕事があるが、この仕事はあまり若い人よりも、あなたのようにちょっと年をとった人の方が向いている。勉強しながらやってみませんか」と奨めてくれました。私はワイン・パトラーがワイン・ボトラーに聞こえ、ひょっとすると地下室で酒樽からワインをびん詰める仕事かと思いきや、当時35歳での再就職、何でもよいから使ってくれと求職した私に仕事を選ぶ資格はなく、「やります、やります」と二つ返事をしました。後で、仕事はホテルのレストランや宴会場でワインのセールスとサービスをする専門職だとわかり、ほっとしたものです。その後ワインの需要が伸びるとともに3人、4人と人数が増え、洋食レストランだけでなく、和食堂、中華食堂までもに人員を配属し、ワインの販売に力を入れました。

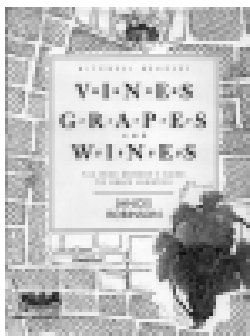
しかし、問題もおきました。日本人客にワインをセールスする時、たまに男性のソムリエの強引さがお客様の反感を買い、苦情につながる場合があったのです。そこで浮かんだのが、女



横山 弘和 / よこやま・ひろかず

1939年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ（東京）入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴアリーエ・デュ・タートヴァン（利き酒騎士）叙任。現在佐多商会ヴィタリテ事業部在籍。

性ソムリエの採用です。日本人の中年男性はどちらかといえば、女性に甘い傾向があります。同じワインでも女性のもつ優しいタッチと色気で奨めれば、ワインの知識のない年輩の紳士も関心を示し、飲んでくれるだろうと考えたのです。ちょうどその頃タイミングよく、ホテル学校出の女性サービス職の中に、飲食サービスの重要さを理解している優秀な人材がいました。まず、1人を試しに教育してみたところ、非常に熱心に勉強し、安心して任せられることがわかりました。その時は、ホテルで初めて女性ソムリエが採用されたと業界でも評判になり、新聞や雑誌からも取材がくるほどの反響をよびました。これは1973年のことで、ちょうど1972年に始まった第一次ワインブームと軌を一にしているといえます。しかし、顧客の中には一部不満な人もあり、ある時そのお客様から呼ばれ何事かと行きますと、「君のところは女性のソムリエを採用したそうだが、私は反対だ。この仕事は男性の仕事で、バリあたりの高級なレストランでも女性のソムリエなど見たことがない」と叱られました。確かにその頃はそうだったかもしれませんが。さらに卓上の飲んでるワインのびんを指し、「こんな上等なワインを、女なんかにお酌されていい気持ちかと思うか。芸者じゃあるまいし」。私は、まだこんな考えの人が女性にこそショックを受けた。また、別に年輩の女性顧客からは、「私がワインを飲む時は、男性のソムリエをつけてちょうだい」と耳打ちをされました。これは、気持ちがわからなくはありませんでしたが。そんな中、女性ソムリエは、優秀な人材に恵まれたことと、彼女たちの素晴らしい努力で、一部を除き大勢のお客様に好かれ、マネージメントも業績を認めたいへん満足していました。1973年から約10年間は、ホテル・オークラに3人の女性ソムリエが在籍した期間です。しかし、結局は女性には結婚などの都合があります。退職を申し出てきた時、私はあらゆることをして引き留めましたが無駄でした。私は、今でも彼女たちを誇りに思っています。その後、我々は何も知らない新卒の女子社員の中からソムリエ職希望者を募集し、ズブの素人から一人前のソムリエを訓練、教育し、できるだけ長く勤務してもらおうと考えましたが見事に失敗してしまいました。所詮、格好よ



『VINES GRAPES AND WINES』Jancis Robinson著  
著者はイギリス人のワイン・ライター。ワイン雑誌の編集で成功し、T.V.のワイン番組でも活躍。他にもワインについての著書が多数ある。

さで応募してきた女性に、ワインの知識やサーヴィスを正しく理解させるのは無理でした。そこで、これという人材が見つかるまで女性ソムリエは一時廃止という決断が下されました。約10年間のブランクを経てまた優秀な人材が見つかり、女性ソムリエが復活し活躍していることも付け加えておきます。

——果たして女性はワイン・テイastingにおいて優れているか？——

確かに、食物や飲物の色、匂い、味わいを、見分け、嗅ぎ分け、味わい分ける能力には個人差があります。ワイン・テイastingに優れた能力を発揮するには、一般人より鋭い嗅覚、味覚を備えもつ必要があります。ここにペンシルヴァニア大学のClinical Smell and Taste Research Center（臨床嗅覚味覚研究所）が、5歳から99歳までの約2000人を対象に行った匂い鑑定実験の結果があります。それによると、すべての年齢層で女性の方が鋭い嗅覚をもっていることがわかりました。同時に、すべての人間の味見をする能力が同じでないことも証明されています。また、エール大学医学部のある教授の主張するところによると、人間は3つのグループ、

- non-tasters 味音痴 25%
- regular tasters 普通 50%
- super tasters 超味見能力者 25%

に分けられるといえます。

super tasterはnon-tasterの100倍もの“taste buds”（味蕾、味覚球、味覚芽などと呼ばれ、舌に分布し味覚を感受する器官）をもっています。これは普通、遺伝による長所であり、通常女性は男性より多くの味蕾をもつとされています。決定的なのはsuper tasterの2/3が女性であったという事実です。しかし、ワイン・テイastingは、単に味蕾だけが関係するものではなく、他に色々なことが絡む複雑なものです。ちょうど音楽の鑑賞力が単に“a pair of golden ears”（特別によい耳）をもっていればいいわけではなく、同じです。

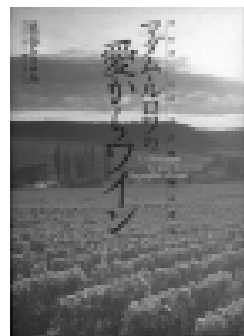
それでは、何故女性がワイン・テイastingに優れているのでしょうか。アメリカのある著名なワイン・ライターの意見ををご紹介します。女性は、人生の早い時期から、さらには一生かけ



『ブルゴーニュワイン』セレナ・サトクリフ著／山本博・監訳  
ブルゴーニュワインのポケットガイドブック。イギリス人の著者は、マスター・オブ・ワインの肩書きをもち、特にブルゴーニュワインの権威として知られる。

て、ニュアンス（色、音、調子、味、意味、感情などの微妙な陰影や差異）について、日夜工夫を重ねているというのです。結局、良質のワインとは、まさに色々なニュアンスの集まりでできた飲物なのです。多くの男性はニュアンスの概念さえ理解するのに苦労するでしょう。それを一杯のワインの中で探すとすればなおさらのことです。例えば、衣服について考えてみると、男性が一日の始めに一番難解な美的決断を迫られるのは、Yシャツに合うネクタイを選ぶ時です。そして、一旦あるYシャツとあるネクタイを決めてしまうと、その後は習慣的決断として毎日それを繰り返すだけです。一方、女性は毎朝、顔色、表情、ドレスと体とのフィット感、そして香りと、単に服を着て出かけるだけでも、毎日色々なニュアンスの訓練をしています。男性は普通シンプルで、少年時代にネクタイの締め方や髪の毛の分け方を父親の真似をして覚え、その後は違ったやり方もせず、毛の多い少ないは別として、一生同じことを続けます。大体このような輩に、抜け目のないワイン・テイastingを期待するのが間違っている、というのです。続けて、彼は、理想的なワイン・テイasterは女性弁護士であると言い、それは女性であることの優位に加え、弁護士として物事を分析して考え、表現力が正確で几帳面であるからだとしています。と同時に、実際にかかなりの数の優秀な男性ワイン・テイasterを知っているが、全く努力しないでその域に達した人は極めて稀だとも言っています。結局と言うが当然と言うか、男性も女性もワインについて物知りになるには、他のスポーツや高度な技術と同じように、そのことに心血を注ぎ、機会をとらえ、訓練を重ねる必要があります。結果としては男性も女性と同等に良質のワインのニュアンスを理解するようになるのです。大事なことは興味を抱くこと、しかし、少なくとも最初の段階では女性の方が有利であるということです。

結局のところ、現在のいささか過熱気味のワインブームの中で、女性の正直さ、純粋さが、一般の人々に、ワインを身近なものに感じさせるのに役だっているのではないかという気がします。そういった意味で、21世紀に向け、ワインのプロとしての活躍をこれらの女性に期待したいと思います。



『マダム・ルロワの愛からワイン』星谷とよみ著  
マダム・ルロワはフランスのワイン業界で最も注目されるワイン・ドメーン経営者。幼い頃よりワイン・テイasterとして非凡な才能を発揮する。ピオ・ディナミのワイン造りに情熱を注ぐ。

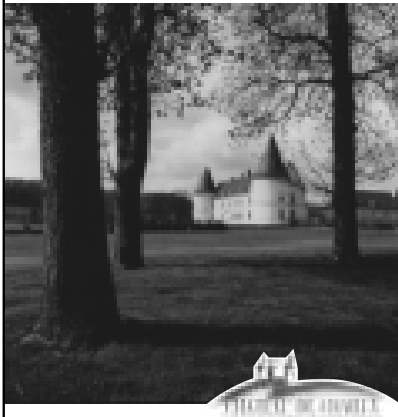
ワイン・テイastingに求められる5つの重要な要素

1. Concentration 集中力
2. Experience 経験
3. Tidy Mindきちんと整理された記憶力
4. Imagination 想像力
5. Humility 謙遜・謙虚な気持ち

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいている  
ブルゴーニュへいらっしやいませんか。  
極上の銘酒を生み出すぶどう畑、  
グルメレストランの数々、中世そのままの街なみ、  
美しく広がる大地や、小さな村々、  
豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、  
それがブルゴーニュです。

Château de Chailly / シャトー・ドゥ・シャイイ



CHATEAU DE CHAILLY

お問い合わせ  
(株)佐多商会ヴィタリテ事業部 担当：岩沢  
**Tel. 03 3582 5087**